花びら無残

大分に来たのが昭和二十四年、数年間は坂ノ市駅からの汽車通勤であった。きまった席に小づくりの美しい婦人が、きまったように原稿を書いている姿があった。だれからともなく、その人が教組婦人部長だと知った。

それから二十年、県社会福祉センター所長のとき、身障者のための寮を作り、その青年たちのための本物の教育者を探していた。敬愛する知人は村上あや先生をあげた。くしくもあの車中の佳人(かじん)である。幾度もお願いに上がるうちに、いよいよ大きく見えてくるではないか。理念としての教育者像を、目の当たりにする思いである。ついに、あや先生は一年だけという約束で承知された。

舎監(しゃかん)としてのこの人と共に日夜を過ごした青年たちは誠に幸運であった。共にした一年だけではない。それに続く幾十年の人生途上、生きる勇気を与え続けていくからである。

あや先生がご自身のために記された舎監記が手元にある。色あせてはいるが、中身

は輝きを放っている。その一節。

—某日。Sさんに付き添って診察に行った鈴木先生から、「このまま入院しますから、次の品々を届けて下さい」とのこと。三十八歳の今日まで一字も読めない重度知恵遅れのこの子の指示する荷物を探すと、指示通りの引き出しや箱から指示通りの品物が出てくる。洗濯した下着類が整理されている有様は、お見事！　荷物の底から赤い花緒の新しい駒下駄が一足出てくる。両足共に退化しズックでさえはけないのに。誰かに頼んで買ってもらったものか。人の秘密をのぞき見したような後ろめたさで、そのままもとの場所に収めた—。

熱い涙と透き通った知性とが融合しあう小宇宙、それが村上さんである。この最重度障害のSさんのために村上さんは、「神様も残酷なことをなさるんですね」と神を責めたことがあった。清純を闘うがごとく独り生きぬかれたあやさんにも、神は無慈悲なことをされた。だれ一人にもお別れを告げるための寸秒さえも与えられずに。

（一九八八年五月七日）